私は絶滅危惧種か

日高医師会　監事
三和医院　院長
三　上　徹　成

正月早々の外来。89才の老婦人と年始の挨拶を交しながら、真新しい腕時計が目に入った。日焼けした皺だらけの腕に、その腕時計だけが場違いなように華やいでいる。私の視線の先に気づき、“新年早々時計を無くしてね、もうあまり長く使うこともないのに、やっぱりないと不便なので買ったんですよ”と少し言い訳がましく言い、3,000円と付け加えた。私も新年早々に無くしてしまい買ったばかり。ご婦人が診察室を出て行った後、まじまじと自分の新しい時計を見つめ、“自分にも残された時間はいくらなのだろうか”と自問してしまった。そろそろ還暦を迎えようとしている身にとって、体内時計の電池の残量はいくばくか。

ところで最近、町に一軒だけ残った寿司屋へ久方ぶりに立ち寄った。カウンターの端に客は一人だけ。定年をきっかけに数年前に名古屋から故郷へ戻ってきた小生の患者さんだ。“珍しいね”と挨拶され、会話が弾む。打ち解けた頃に、“帰ってきてよかったと思うけれど、町の医者が先生一人だとは。先生より長生きしたらどうなるのだろうかと、つい考えちゃうよ”と彼の一言。こちらも負けずに、“僕だって、自分が病気になったらどうなるのかと、いつも考えちゃうよ”と切り返す。そして寿司屋の親父と三人、そう遠くはない時期に持ち上がるであろうこの町の医療危機に三人三様思いを馳せながら杯がグイグイとすすむ。飲兵衛はなんでも酒の肴にしてしまう。そして“先生、体に気をつけて下さいよ”との結論。この町では患者さんが医者の健康の心配をしなくてはならないようだ。あまりフラフラと夜は飲みにも出られないなと思いながら席を立つ。

この町で医者一人となってからもう４年近い。状況はかなりきついけれども、最近町民の目線が少し優しくなったのを感じる。しかし、今や田舎では私たち開業医はもはや絶滅危惧種になったようだ。最後の一羽となり絶滅していったあの隠岐の朱鷺をいとおしく想う昨今でもあります。

市立三笠総合病院についての雑感

北海道医報通信員
三笠市医師会　理事
市立三笠総合病院　外科部長
羽　田　　力

市立三笠総合病院に赴任して足かけ14年目の春を迎えようとしている。赴任当時三笠市の人口は約15,000人、当院の病床数は286であった。隣接する岩見沢市、美唄市にはそれぞれ２つの総合病院があり、赴任当時はこの立地条件で病院が成り立っていくのかと不安を感じたことを覚えている。しかし、そのような中で当時の常勤医は18名であったが１日平均入院患者数は273名、１日平均外来患者数は736名と病院全体が活気に満ち溢れていた。私の担当科である外科と整形外科、産婦人科、泌尿器・人工透析科が、２つある手術室を取り合うように使用していた。

その後、国のエネルギー政策の転換から市の基幹産業である炭坑が相次いで閉山した影響で、人口は年平均300人ほどずつ減少し現在は10,711人である。また、人口構成比は高齢化の一途をたどり、現在65歳以上の高齢者が42.2％、75歳以上の後期高齢者が22.9％を占め、三笠市は日本屈指の高齢自治体となっている。

現在の病院は常勤医11名と慢性的に医師が不足し、病床数は199と縮小されたが、１日平均入院患者数は152名、１日平均外来患者数は462名と医師一人当たりの患者数は14年前とほぼ同数を維持している。しかしここ数年間の医療費抑制政策のため収益は悪化する一方であり、国からの交付金と一般会計からの繰入金で何とか体裁を繕っている状態である。

では当院は、もはや市民にとって不必要な病院になってしまったのだろうか？答えは「否」と思いたい。若者はいざ知らず、高齢者にとって岩見沢市内の病院に通院することは一部の方を除いて簡単なことではない。また、受け入れる岩見沢市内の病院の容量にも限界があるだろう。ましてや、現在休日夜間に当院が扱っている救急患者がすべて岩見沢市内の総合病院に搬送されたら、それこそ大変なことになるだろう。

行政の方々には目に見えるお金の出入りだけではない、この地域で当院が果たしているショックアブソーバーとしての機能が、いかに大切かということを理解していただきたい。市民の方々は休日夜間のコンビニ受診を極力避けていただきたい。当院の医師も高齢化してきており当直の負担は相当なもので